



## 地域の文化資産を活かした関係人口創出の試み —新潟県南魚沼市の多聞青年団を事例に—

高塚 苑美

MFA（芸術修士） 京都芸術大学大学院 芸術研究科 研究員

### 基礎となる地域研究

### 目的・背景

- 本研究は「南魚沼市八海山麓地域の風土の研究」（海老原仁美,佐々木淳,佐藤隆彦,中川悦宏,高塚苑美, 2023）をもとに、固有の文化資産を取り上げる個人研究として実施した。
- この研究では「八海の国風土記」や「歳時記パネル」等をプロトタイプとして制作した。



八海の国風土記HP

地域特有の文化資産を発見し、それを利活用することで地域の課題を解決する。



図1. 八海山麓地域（八海の国）の範囲

**浦佐地区** ▶三国街道の浦佐宿、毘沙門堂の門前町として発展。1982年に上越新幹線浦佐駅が開業。近年まではスキー観光で賑わったが、スキー場閉鎖と共に衰退。

**浦佐毘沙門堂裸押合大祭** ▶雪国に春を告げる祭とされ、毎年3月初旬に開催。起源は不詳だが1200年ほど続くとされる。2018年に国指定の重要無形民俗文化財に登録。2020年～2022年は神事のみ実施、2023年は4年ぶりに開催された。

**浦佐多聞青年団** ▶大祭の執行を担う。19歳～30歳の男性で構成。

課題：若者の流出およびコロナ禍での帰郷制限により団員が大幅に減少し、大祭の維持継承が困難になっている。

先行研究では、毘沙門堂裸押合大祭について研究されたものはあるが、多聞青年団自体を取り上げたものはない。

- 池田 哲夫「浦佐毘沙門堂の裸押合い祭り見学記」『高志路 (363)』p.23-25, 新潟県民俗学会, 2007年
- 伊藤 治子「裸押合い祭りの「ねこしき」--新潟県南魚沼郡大和町浦佐」『高志路 (339)』, p.28-35, 新潟県民俗学会, 2001年
- 越後浦佐毘沙門堂裸押合大祭の記録編集委員会 編『雪と炎の奇祭：越後浦佐毘沙門堂裸押合大祭の記録』浦佐毘沙門堂裸押合大祭記録保存実行委員会, 2009年
- 鈴木 昭英『浦佐毘沙門堂裸押合いの昔と今--祭式儀礼を中心として』『宗教民俗研究 = Studies of religious folklore (20)』, p22-54, 日本宗教民俗学会, 2010年
- 平野 孝国「裸押合い祭の構造と「祈り」の意味」『新潟大学教育学部紀要.人文・社会科学編 28(1)』 p168～152, 新潟大学教育学部, 1986年
- 本田 郁子「地域社会における伝承的身体表現に関する研究--新潟県南魚沼郡浦佐裸押合い祭りを事例として」『研究論叢. 第3部』 山口大学教育学部広報戦略部, 1985年
- 本田郁子「新潟県における裸押合い祭りの伝承と変容」--新潟県における裸押合い祭りの比較研究一, 1985年
- 南魚沼市教育委員会『浦佐毘沙門堂の裸押合の習俗「浦佐毘沙門堂の裸押合の習俗」総合調査報告書』南魚沼市教育委員会, 2009年



多聞青年団自体を文化資産と捉え、その価値を活かして関係人口の創出をすることで、若者の流出、団員減少といった課題を解決する  
ができないか？

以下の調査によって多聞青年団の現状と課題、価値を明らかにした。  
 研究期間 2022年4月～2023年3月

1. 文献および先行研究調査
2. 聞き取り調査  
 多聞青年団現役団員、元団員、OB、大祭実行委員、地域住民等
3. アンケート調査
  - ①関係者へのアンケート調査 (n=55)
  - ②モニターツアー参加者への事後アンケート調査 (n=8, 参加者=10)
4. 参与観察  
 2022年4月～2023年3月



デザイン思考を用いて、地域課題である若者の流出、団員減少を解決するためのプロトタイプを生成・試行した。

多聞青年団のなりたちと現状

研究・調査・分析結果

- 前身は明治37年結成の浦佐青年会で、戦後に近隣の青年会を再編し、浦佐多聞青年団となった。当時の団員は112名。
- 県の青年団連合には属しておらず、大祭執行のみを目的とする集団。
- 団員数は1980年をピークに減少。大祭執行に必要な人数は120名とされるが、2023年度の団員数は67名、内13名は東京など遠居の者であり、大祭当日の実働は半数程度であった。

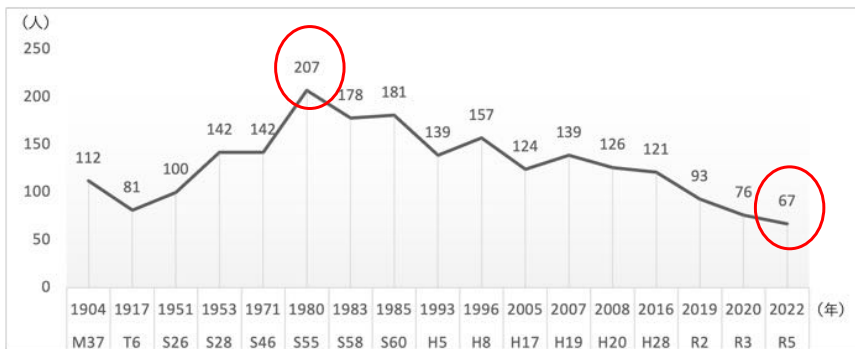


図2 団員数推移

役職	年齢	人数(人)	内市外在住(人)
最高幹部	29	7	3
次期幹部	28	1	
二期幹部	27	9	3
三期幹部	26	17	1
	25	8	3
	24	8	2
	23	1	
	22	4	1
	21	6	
	20	2	
	19	4	
全体		67	13

表1 令和5年度団員数

2022.12末時点

平成19年度	全団・主要行事	各係（幹部・次期幹部・二期幹部）	OB
5月2日	八十八夜 大炊煎		
5月14日	実行委員会設立総会		
6月10日	応急教護講習会		
6月18日	実行委員会 学習会		
7月19日	湯治夏祭り 若者有志の会神輿		
7月22日	鹿沙門大夏祭り 打ち合わせ		
8月6日	鹿沙門大夏祭り		
8月16日	九日町・沼垂祭に参加		
9月3日	山岳マラソンにてPR、境内清掃		
9月18日	鹿沙門天竺強会		
10月9日	八色の森市民祭りにてPR		
11月3日	ネコカキ		ネコカキ指導、手伝い
1月3日			年始回り（外進係）
1月4日		挨拶回り、企業、団体、区長など（外進係）	
1月6日		内進係顔合わせ	
1月7日	学年別代表者会議	ローソク係	
1月9日		講中案内葉書送付（内進係）	
1月10日		資料作成開始（警備係）	
1月13日			OB挨拶回り（内進係）
1月15日		敬与者抽籤会（内進係）、臨時総会資料作成（庶務係）など	
1月21日		内進係	
1月26日		ローソク係、警備係、庶務係、ニュースおねり係・教護係	
1月27日		外進係、顔合わせ（外進・ローソク・警備係）	
1月28日		内陣係	
2月3日	事務所開き		
2月4日	第1回臨時総会		OB～二期幹部交流会（警備係）
2月8日		講中挨拶回り（内進係）	
2月9日		大名行列参加者名簿回収（ニュースおねり係）	
2月10日		第1回勉強会（内進、外進、内陣、ローソク、庶務係）	
2月13日		第2回勉強会（庶務係）	
2月16日		勉強会（外進・ローソク・警備係）	
2月18日	この期間中に 第2回臨時総会	第2回勉強会（外進係）	
2月19日	懇談中・餅会回り	団体水行最終調整（外進係）	
2月21日		勉強会作成（内進係）	
2月22日		勉強会作成（外進係）	
2月23日		第2回勉強会（内進係）	
2月25日	水行開始		
3月1日	境内の整地、祭場の準備		
3月2日	慰問・前夜祭		
3月3日	大祭		
3月4日	青年団総会		
3月7日	お日待ち・大祭反省懇談会		

注）一覧表は、市教委「報告書」2009、194頁の表5-2「多聞青年団視察の準備日程（平成19年度）」に、湯治多聞青年団「多聞青年団HP 平成19年度最高幹部活動記録」  
<http://www.urasa-tamon.com/h19/>（参照2023.1.6）掲載の情報を合わせて筆者作成。  
 ・画像出典 ネコカキ・・・2022年11月6日に行われたものを筆者撮影  
 餅会回り、水行・・・湯治多聞青年団「多聞青年団HP-平成26年度最高幹部（懇談会）」<http://www.urasa-tamon.com/h26/>（参照2025.1.6）

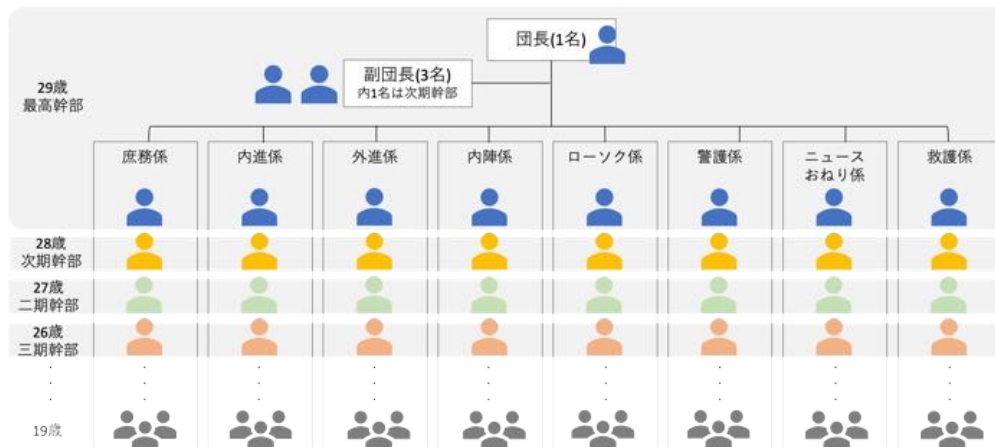
図3 多聞青年団の活動

活動

- 活動は年明けから本格化。当日は堂内、境内、境外の持ち場に分かれ分刻みのスケジュールで業務を行う。
- 2月初めの事務所開き後、最高幹部は精進潔斎で身を清める。

組織

- 学校と同じく年度を基準に11の層となっている(図4)。
- 最高幹部から団長1名、副団長2名、次期幹部から副団長1名が選出される。その他8つの係では最高幹部が係長を務め、縦割りの組織で当日の業務に当たる。
- 団員不足により現役だけでは係が運営できず、大部分をOBが補填している。



※団員は19-30歳であるが、30歳の年度に卒業のため、ここでは最高幹部を29歳と表記した。

図4 多聞青年団の組織図

団員減少は結果であり、本質的な課題は3点挙げられる。

1. 組織構造の破綻：団員不足によりOBが手伝うことで、序列にねじれが生じている。
2. 暗黙の了解が多い：地縁血縁で運営されてきたため、たとえば入団方法でさえも外部の人に伝わる形になっていない(図5)。
3. 大祭に特化したことによるデメリット：地域の出来事毎に行事や業務が追加され肥大化した(表2)ことで、現役団員の負担が増加。

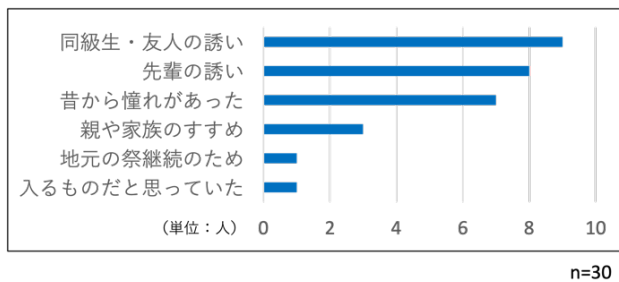


図5 入団のきっかけ

年	行事の変遷	地域のできごと
S28	多聞青年団発足	
S29	稚児行列始まる	
S31	中学生の押合参加が始まる	大和村発足
S33	銀盃奉納行列始まる 前夜祭に点灯式が行われる	浦佐スキー場開業
S34	奉納行列にお駕籠2丁加わる 餅講中の奉納行列始まる	
S40	大名行列が始まる (開始年不明のため推定)	
S50	弥彦事件の影響で中止されていた福餅撒と復活	
S53	献火式を儀式化	
S57	前夜祭のテントイベント開始	上越新幹線 新潟-大宮間開業 国際大学創立
S60	前夜祭で掘り出し物市開始	関越自動車道開通

表2 大祭にまつわる行事の変遷

多聞青年団の価値

多聞青年団は地域内のハブとなって縦横のつながりを創出する価値を有している (図6,図7)。

1. 同級生のつながり：小中学校の同級生の延長で組織され、青年団卒業後も還暦まで「餅会」を結成し、同窓会的役割を果たす。
2. 先輩・後輩とのつながり：現役時代に上下10歳ずつのつながりを形成。上が下に教える形で伝統行事が継承されている。
3. 世代を超えたコミュニケーション：現役が「餅会回り」をすることで上の世代に顔を売ったり、教えを乞う機会になっている。

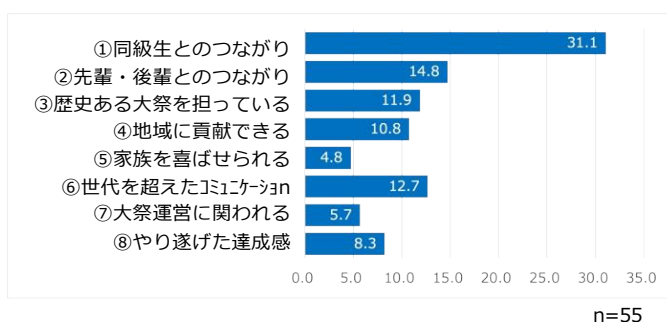


図6 多聞青年団に感じる価値

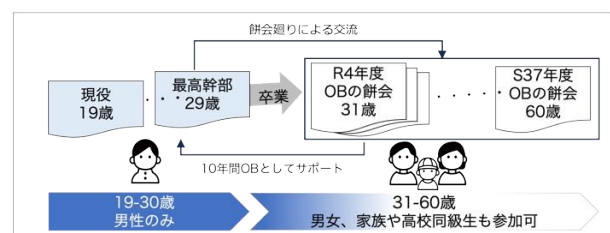


図7 多聞青年団が生み出すつながり

多聞青年団の課題

- 地縁・血縁など強いつながりの人たちだけで構成、維持されてきたため、閉鎖的で暗黙知が多い凝集性の高い集団。縁がないと情報を得られない。



仮説

意図的に縁を作ることで関係人口を創出することが可能ではないか？

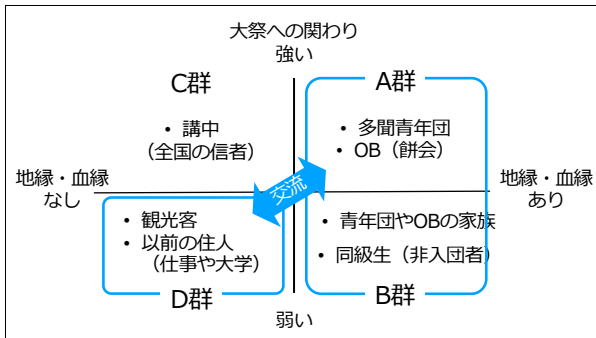


図8 プロトタイプ概念

これまで

A群（青年団やOB）、B群（A群の家族など）とC群（講中）をもてなす関わりのみ。D群（観光客など）は交流がない。

本プロトタイプ

A、B群とD群との間に交流を生むことを目的にモニターツアーを生成。

2023年3月4日(土)の大祭および前週の行事に合わせ、モニターツアーを実施し、全国から10名が参加。

- A群にあたるOBの餅会「朋榮会」を受け入れホストとして設置。
- 参加者には「多聞青年団のトリセツ」を用いた事前レクチャーを実施。
- 餅つき体験、大祭会場の準備や裏側見学、当日の行事参加等を実施。

実施概要		
日程	2023.2.26 (日)	餅会 (大祭時に奉納する餅をつく会) 大祭会場 (浦佐毘沙門堂、普光寺) の案内、行事の解説
	2023.3.3 (金)	前夜祭 行事の解説、行事参加 (餅まき、水行、押合い)
	2023.3.4 (土)	裸押合大祭 大祭行事の解説、行事
受け入れホスト (A群)	朋榮会 (平成26年度最高幹部、2023年現在38歳の代)	
参加者	10名 (男性7名、女性3名)、全日程参加: 4名、一部日程参加: 6名	
参加者の居住地	京都府、愛媛県、兵庫県、群馬県、埼玉県、東京都、神奈川県、新潟県	
参加のきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 以前に住んでいたことがあり、離れてからも何度か訪れていた</li> <li>• 以前に裸押合に参加したことがあった</li> <li>• 友人・知人に誘われた</li> <li>• 自分の住んでいる地域でも祭りが盛んで、他の地域の祭りにも興味があった</li> <li>• 地域の風土に興味があった</li> </ul>	

図9 モニターツアー概要



全8頁 A5サイズ

図10 多間青年団のトリセツ



図11 餅会での餅つき体験



図12 会場ガイドツアーの様子



図13 当日の宿元での受け入れ

事後アンケートの結果、観光では体験できない地域の人との交流が満足度を高めているといえる。

- 最も満足度が高いのは「宿元での地域の人との交流」
- 全員が「また南魚沼市を訪れたい」と回答
- 再訪目的は大祭、山菜取りなど季節のアクティビティ

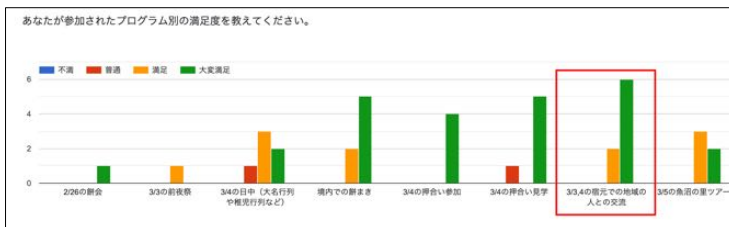


図13 項目別満足度

- 餅会 (2/26)
- 前夜祭
- 日中行事 (大名行列など)
- 境内での餅まき (観光客は参加不可)
- 押合い見学
- 宿元での地域の人との交流
- 3/5の魚沼の里ツアー (観光)

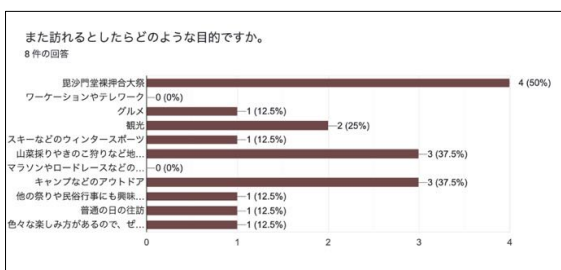


図14 再訪の目的

- 鹿嶋門堂裸押合大祭
- ワークショップやテレワーク
- グルメ
- 観光
- スキーなどのウィンタースポーツ
- 山菜取りやきのこと狩りなど地域ならではのアクティビティ
- マラソンやロードレースなどのスポーツ
- キャンプなどアウトドア
- 他の祭りや民俗行事
- 普通の日の往訪

## 考察

これまで多聞青年団は大祭の執行および維持継承という点で評価されてきたが、本研究において地域のつながり創出という価値に着目したことで、関係人口創出の手立てとなる可能性が示唆された。

## 今後への課題と展開

- ✓ 今回は遠方の人を対象にしたプロトタイプであったため、今後は南魚沼市内をはじめ近隣への情報発信が必要。
- ✓ 地域の人自らが主体となった取り組みや受け入れ体制の整備が求められている。（今後勉強会を実施予定）
- ✓ 南魚沼市には郷土資料館もなく、外部の人が地域のことを知る手立てが少ない（ハード面）。地域の人が地域のことを伝えるような機会や場の創出、スキル（ソフト面）が必要。

## 引用・参考文献

- 熊谷辰治郎,1989（初版 1942）『大日本青年団史：復刻版』
- 鈴木牧之著ほか『北越雪譜』2編 巻1,万笈閣,出版年不明,国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/767987> (参照 2023-01-01)
- 総務省“関係人口とは” 関係人口ポータルサイト,2023.3.15,<https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/about/index.html>, (参照 2023-07-09)
- M. グラノヴェター（大岡栄美訳）,2006「弱い紐帯の強さ」野沢慎司（編・監訳）『リーディングス ネットワーク論-家族・コミュニティ・社会関係資本』
- 中根千枝,1967『タテ社会の人間関係 単一社会の理論』
- 平山和彦,1988『合本青年集団史研究序説』
- 広井良典,2014『コミュニティを問いなおす 一つながり・都市・日本社会の未来』
- 本田郁子「新潟県における裸押合い祭りの伝承と変容」1985年
- 南魚沼市教育委員会,2009『浦佐毘沙門堂の裸押合の習俗「浦佐毘沙門堂の裸押合の習俗」総合調査報告書』
- 南魚沼市教育委員会,2020『大和町の近・現代』
- 南魚沼郡誌編集委員会,1971『南魚沼郡誌』続編 上巻
- 鎗田進也「地域社会づくりにおける「つながり」概念の検討」『立正社会福祉研究』12 (2) P37-44, 立正大学社会福祉学会, 2011年